熊日1969.03.25

あすを興す

＊熊本は発言する

《9》

第二産開発の点検

公害防止の力べ

工場廃水で汚水が流れる八代市の日置川

意外な市民の反応

「公害のない産業は考えて企業力が弱いものです」

「公害の伴わない工場なんて地域の繁栄にあまり役立たないものですよ」

公害をめぐる市民意識の変化を知りたいと水俣市を訪れたら、市民の口からこんなことばを聞かされて驚いた。

周知の通り、水俣市民は水俣病という悲惨な事件を経験した。百十一人が発病、うち四十二人が死亡、六十九人が後遺症に悩まされ、補償問題はいまもって尾を引いている。

発病当時は原因がわからなかっただけにわが身に振りかかりはしないかとおびえ、この原因究明をめぐり関係のない市民同士がみにくい、悲しみ合った。原因判明後の今日でも賠償問題が解決せず、補償問題を一層複雑なものにしている。

公害の恐ろしさ、発生後の解決のむずかしさを身にしみて知っている水俣市民の耳にしてはいささか"場違い"に聞こえたのである。

「公害防止の力べ」はどんな企業を育てるか」などと問い詰めていくと、「少しぐらいの公害は町の繁栄、生活の向上のためやむを得ない」といったニュアンスのセリフに変わるのである。

もっともこんなセリフがどの口からもストレートに出てきたわけではない。「公害は困ります」といい、「とくに水俣病のような悲惨な事件は二度とあってはならない。真っ平です」とどの市民も強調する。

市民の三分の一が工場関係者であることも影響しているのだろうが、むしろ黒い煙を吐く煙突も、臭気も繁栄の象徴として市民の心深く定着しているように思えた。

「公害の全くない企業を誘致するのは非常にむずかしい。誘致となれば、そんなゼイタクはいえないですよ」

渡辺勝一水俣市助役も自信なげな笑いを浮かべ、言外に置頭の市民感情を認めた。

公害意識は変革したが

もちろん公害に敏感な、いわば公害アレルギーの人たちもないわけではない。「資本の横暴を許すな」と憤慨する声も聞いたし、「公害をもたらす企業なんて追い払え」などと勇ましいセリフもあった。しかし冷静に判断すると、これらのアレルギーは公害そのものでなくて工場に向けられた憎しみが先行している場合が少なくない。公害追放を広い視野の中でつかまえている人たちはほんの一握りしかいない。

それではあれだけの犠牲を払いながら市民の公害意識は変化しなかったのだろうか。

「いや、水俣病発生以後、公害に対する市民の関心が高まったことだけは確かです。市議会には公害対策特別委員会が設けられたし……」

「補償に対する姿勢もはっきりしました。水俣病発生以前は少しぐらいの煙害はやむを得ないと考えていた市民も多かったようですが、その後は病害によるものまで持ち込むありさまです。権利意識はたしかに高くなりましたね」

理由は水質規制しても魚が獲ることになったところ、地元の一部から「規制区域指定は困る」との苦情が出始めているという。

工場は経営第一主義

一方、公害についての工場の姿勢はどう変わったか。一般的にみて、かなり神経を使い出したことは事実である。それも補償問題から防止問題へと変わりつつある。

チッソでは一昨年粉じん防止の新鋭装置（二千万円）を、昨年もガス漏れ防止装置（六百万円）を新設、現在は火力発電の煙突改造に取り組んでいる。また工場内に公害課を設け「自主規制に努めている」という。

八代市の十条製紙も電気集じん機（六千二百万円）を増設するとともに自家発電機（十七億六千四百万円）も増設し、その冷却水で廃水の温度を薄める予定。また興人でも二硫化炭素の回収装置（三億五千万円）を新設して硫化ガス防止につとめ、中和剤（そう）を設けて廃水の水質改善を図っている。三菱オーシャンも水質改善のため蒸留機（三億円）を設置中。

かといって、これで公害がなくなるわけでもない。チッソも硫化ガスによる被害がなくなったわけでないと渋い顔だったし、十条製紙も「自然水ほどにつくる保証はなく、規制によって工場側からの補償金や助成金（市の負担を含め年間二千三百万円）が打ち切られる恐れがあるためなのだそうだ。全く変な話である。

忘れられた人間回復

補償にだけ向く住民

関係者は「市民意識は変化した」と強調するのだが、これもよくよく調べてみると公害対策委員で、二の委員を除いて活発ではないようだし、補償には敏感になってはいるものの、補償をとるだけに終わって、工場側に抜本的な防止策をとらせるだけのエネルギーを生み出すまでには至っていないようだ。

工都八代でも同様の話を聞いた。八代では十条製紙、興人、三菱オーシャン、日本セメントなどの工場から出る廃液、ガス、粉じんが問題となり、とくに日奥川は汚染のため死魚が浮くなどの被害が出ているが、県と経済企画庁が水質規制の調査を始めるまで調査を始める模様はない。

八代市の十条製紙も電気集じん機（六千二百万円）を増設するとともに自家発電機（十七億六千四百万円）も増設し、その冷却水で廃水の温度を薄める予定。また興人でも二硫化炭素の回収装置（三億五千万円）を新設して硫化ガス防止につとめ、中和剤（そう）を設けて廃水の水質改善を図っている。三菱オーシャンも水質改善のため蒸留機（三億円）を設置中。

かといって、これで公害がなくなるわけでもない。チッソも硫化ガスによる被害がなくなったわけでないと渋い顔だったし、十条製紙も「自然水ほどにつくる保証はなく、規制によって工場側からの補償金や助成金（市の負担を含め年間二千三百万円）が打ち切られる恐れがあるためなのだそうだ。全く変な話である。

工場は経営第一主義

一方、公害についての工場の姿勢はどう変わったか。一般的にみて、かなり神経を使い出したことは事実である。それも補償問題から防止問題へと変わりつつある。

チッソでは一昨年粉じん防止の新鋭装置（二千万円）を、昨年もガス漏れ防止装置（六百万円）を新設、現在は火力発電の煙突改造に取り組んでいる。また工場内に公害課を設け「自主規制に努めている」という